

成形圖說

菜蔬部

二十一



共三十本

特別
二一
144
20



加 / 1
號 144
卷 2120

成形圖說卷之二十一

目錄

苧アラネ
菜オホ子菘カブラ
蕪カブラ菁ラ



成形圖說卷之二十一

成形圖說卷之二十一

菜部 園蔬類

菜此よりは奈と云凡嘗と通ふ詞みく飯と副く茹物と統
 と奈と云や俗云飯の菜ハ枕冊子ハ添と云るの訛みて
 云因魚とも奈といひ又美て真菜と稱ハ菜よ里揚まる
 とつ今おほがれ菘哉奈やハ菜中のいちどる地と
 以くあり猶いみ一獸ミはきミ鹿と食とせしはな
 へての肉とば志いこ訓ミがばゆし又蔬と書紀又久佐比
 良と訓ハ艸葉の義あり葉と比良と訓ハ葉手ミのたと
 式又葉盤ミ子作ミ又花のミ辨ミ大葉ミ小葉ミ手ミ和名ミ鈔ミは
 又俗又素食と草葉汁ミかどミ今もつるミ和名鈔ミは

成形圖說卷之二十一

菜蔬の字と連て久左比良とし菌と志の訓ハ菌亦菜
となつより轉るものぞ又菜とば直ニ葉と云ハ祝詞
式子奥津藻葉邊津藻菜とあるが如し今の俗ハ泣く野
菜と稱ふことニ式子謂大野原ニ生物者甘菜辛菜と云
又山野能物波甘菜辛菜など幾らとありて野生の物か
らでと輦轂の地ニ居てハば菜蔬の類郊野ニ他する
ものも多むじくハ野ノ某菜野の某蔬と稱へし雅語
の遠くハ訛りて已ガ疇宅ニ他する園菜と云野菜と云
ふの通稱ニなりふきともく又斯書ハ當用と主とせり
がゆ多園菜と云く首頁ニぶゞやリ一通子々食物知新

云素問五穀為養五菜為充所以輔佐穀氣疏通壅滯也凡
菜蔬本所生于原野移之栽於田圃或摘采於山野或採於
河海以備于膳食也蓋菜蔬可食者名菘予謂近世益珍饈
奇饌異肴多矣由之今也王公大人尤賤藜藿而特貴殊珍
之芼羹難得之肴菘且怙富而委口腹於厨吏包丁多不辨
菜茹之主治不可而已醫家亦不明食性而無由教戒病
人云々凡菜蔬の類田圃ニ培る者ハ素らり小く阿しき
ものやいへど其性柔なりて毒無しさて山野ニおれ
ばうらまらものハ其性良からず味専なれば割し周
て藥ニ入るふて山野のものとしし食料不培甚

ものどらしと凡山聖子生る者ハ氣と養し川澤に生
る者ハ水道越清し海濱に生る者ハ滯と通次葢地産に
よりて肥瘦別業の別あるまじ自然に在る

七種新菜

正月七日新菜の羹と油ふくと或もむらへは野生地種
と採り今又園菜と雜用ひきて其中て来る所史に蘭を
里葢本年の新蔬菜羹と 二所大神宮へ奉り御饗殿に
供ふと延暦二十三年撰む所の大神宮儀式帳に載
られしハ舊き御代の例にて奥津御年の田穀ハ去歲
の秋に成まるものゆゑ歳内にも初穂成ハ皇神に奉ら

るまじり張菜蔬ハ志も是年の初春に生れ出るとなれば
是と新年に初穂との等し其羹はくし若く又皇神に奉
らせむ此乃 先王報本の盛意なりやらし既に稲の
不一譯に述ぶがごとし若くあは玉の年立歸り來る
其地朝より小松ひくくともや杉水に望べし出くまじき
かきや帝をくま菜摘ると立録へるまはひかへ乃
歌より較く見えくお今集 仁和の帝は其よりたは
しましけり時人よ菜菜ふびあふくして衣衣より言はふ
可成くときものしあふあははなへ今もうけし目子に在る
がぶと中ゆのや若菜ハ野原と川邊より其の菜葉集

饗^シち^カ波^カ里^カ二^ナ菜^ナ摘^ツ殘^ス兒^コふ^トふ^ク傳^リ又^リ川^カ上^リ流^ス
 名^ノ菜^ノの^シ流^ス是^レ来^リし^トも^スん^ク皆^ク名^ノ菜^トは^シ初^メ苗^タ菜^ノの^シ流^ス
 名^ノ那^ノろ^ろぞ^ろし^若ら^ハ國^ノ語^ヲ稚^キも^弱も^春も^刻
 也^シそ^レ正^ノ月^ノ七^日の^菜羹^ト七^種と^スこ^レは^正月^ノ十^五
 日^ノ七^種地^ノ御^ノ粥^ト御^ノ食^ヲり^出し^名ふ^テ也^何り^ク延^喜
 主^ノ水^式曰^正月^ノ十^五日^供御^七種^粥料^中宮^亦同^米一^斗五^升粟^黍
 黍^子稗^子藟^子藟^子胡^麻子^小豆^各五^升塩^四升^と云^ク此^藟子^和
 鈔^引本^朝式^和名^美乃^出處^未詳^と何^り今^按二^藟爾^雅作^皇
 皇^本艸^菑艸^救荒^野譜^菑艸^生水^田中^苗似^小麥^而小^四月^熟
 熟^可以^作飯^充飢^と何^り多^識編^美乃^古米^と尺^えし^と
 薯^蓀或^曰白^穀大^豆小^豆粟^柿苳^子書^紀天^武天^皇十^注
 注^小苳^子と^大角^豆子^代ふ^と何^り

年正月七日召親王諸王於内安殿使諸臣侍外安殿置酒
 賜樂と何るそ七日の節會の始て貞觀儀式の宣命曰
 今日波正月七日乃豐樂聞食須日尔在故是以御酒食閉
 惠良岐常毛見留青岐馬見遍止と何りて七種の羹等の
 事ハ記しと定む但正月子日地若菜此事ハ本朝文粹
 子載以管贈大相國早春觀賜宴宮人應製の序に聖王命
 小臣分類舊史次見有上月子日賜菜羹之宴臣伏惟自觴
 王公於正朝至喚文士於内宴首尾二十餘日洽歡言志者
 諸不及婦人此唯丈夫而已中况亦野中荳菜世事推之蕙
 心爐下和羹俗人屬之羨指宜哉我君特分斯宴獨樂宮人

矣と有り所謂子日七種菜なりて七種と云ふ事ハハハ
寸子日の宴ハ類聚國史 平城天皇大同三年子幼て尺
え 嗟峨 傳和まで有りて又文德實録子天安元年正
月賜曲宴昔者上月之中必有此事時謂之子日燕也今日
之宴修舊迹也延長御記子采女調和若菜羹供進給侍臣
盛中院置中盤云々是と子日の宴めて後くハ寛和元
年 圓融上皇遊紫野折小松立沙上設宴謂之子日遊是
等上月子日の宴とハわれど七日の七種云ふはしほこ
のやゝ師光卿年中行事資隆ハ麓中鈔ふども是るんさ
きはよく不審オホツクサや大宗家訓篋篋内傳等の書子七種

の若菜七種の粥かどあれと後人の化かせし浪況あり
因て前不言へるがどと七種云ふ名を七種の御粥と
出まらんとはわらるるあり又重明親王記子天曆四年
二月廿九日女御安子朝臣奉若菜と有り或は若菜
と奉るかと正月七日小限らざるを志るべし然ども類
聚雜要供御子七種若菜次十五日粥と次第し御盤七枚青
瓷佐良七口かど載られ又夫木集公初の歌子君り為七
の胡乃七種と云つこと一ん万代乃長とあれハ高幼カガ
み七日み七種と擣りし也一書に 宇多天皇寛平二年
正月上子日勅内藏寮内膳司獻若菜其後或十二種或七

種どもろろり今の善菜の御羹ハ水無漸家より献ら
 坊玉ひく菘と芥^{カキ}ハ加^カら進又檀司供所よりなる七
 種の御漸ハ善の漸ありて芥を少し加つてなる事とか
 ん中人ありき本朝食鑑曰 本邦正月七日嘗七種菜粥
 以齋為一種近世但用齋菜餅子作粥菘
 今東國の俗賀茂百首慈徳寺にあふぞかし^ハあけ
 食^ハせりつみくそやせりこれをものゝろん六の善七
 種はあま^ハぞ^ハはよ^ハし^ハは西土の書は不
 能食粥羹之以菜可也ふとんえ^ハ色^ハふ^ハあ^ハれ^ハど 皇
 國ハ穀蔬豊穰の中土ありと^ハあ^ハ異^ハや^ハう^ハの^ハ野^ハ州^ハな
 んどかりうしく^ハれ^ハり^ハと^ハ入^ハん^ハふ^ハと^ハハ^ハお^ハれ^ハと^ハ已^ハる^ハき

理あり固今一書れ説ども^ハ並^ハへ^ハち^ハる^ハしく^ハた^ハり^ハぬ
 ○源氏談善成卿河海鈔ハ七種菜ハ齋^ハ羹^ハ薯^ハ芥^ハ菁^ハ形^ハ酒
 酒代佛之座と云く是年中^ハ事^ハ拾^ハ芥^ハ鈔^ハ公^ハ事^ハ根^ハ源^ハの^ハ説
 並^ハ同^ハし^ハ枕^ハ州^ハ子^ハに^ハ七^ハ日^ハ乃^ハ若^ハ菜^ハと^ハ人^ハの^ハ六^ハ日^ハ乃^ハて^ハあり
 寺^ハ取^ハ敷^ハし^ハか^ハど^ハす^ハり^ハに^ハ見^ハも^ハち^ハぬ^ハ州^ハ子^ハぞ^ハあ^ハり^ハて^ハあ
 る^ハ何^ハと^ハり^ハと^ハ云^ハとい^ハつ^ハど^ハと^ハね^ハま^ハとい^ハふ^ハい^ハさ^ハか^ハと
 これ^ハう^ハま^ハ合^ハて^ハ野^ハ州^ハと^ハあ^ハん^ハ云^ハとい^ハふ^ハの^ハあ^ハま^ハは^ハ宜
 なる^ハり^ハり^ハぬ^ハ顔^ハなり^ハハ^ハあ^ハま^ハ笑^ハふ^ハ又^ハを^ハり^ハげ^ハぬ^ハ菊
 の^ハ生^ハる^ハば^ハて^ハ来^ハま^ハは^ハは^ハめ^ハど^ハ持^ハる^ハ茶^ハと^ハ持^ハつ^ハれ^ハか
 くれ^ハあ^ハま^ハし^ハり^ハま^ハき^ハく^ハも^ハま^ハじ^ハけ^ハり
今播まらば正月
六日に明日かむ

大尾宗基公七種乃異同或校訂され始て其定説を以て
 是所謂須受奈須受志乃芥菘形繁縷佛乃菘あり今京
 師松尾社家より献る七種即是あり按て芥菘は其の知
 る不あり 芥菘は菘軸艸あり菘軸艸一名ハ黄蒿と河
 里御形ハ黄蒿乃轉音と云ハ又此艸の葉細大共ハ五尖
 わり故ハ五行艾と呼ぶるとそ 一説ハ亦牛蒡の事とも
 也 繁縷ハ亦其の知る所あり 一説ハ田平子ともあり
 佛の座ハ車前あり 一説ハ生瓜菜あり年中事ハ菘あり
 一説ハ半脚あり芥菘根の子芥と云 須受奈ハ即菘菘
 方一附る佛の蓮花座子象ると云 須受奈ハ即菘菘
 也須受とハ内膳式に蔓根須々保利とありて須々保利

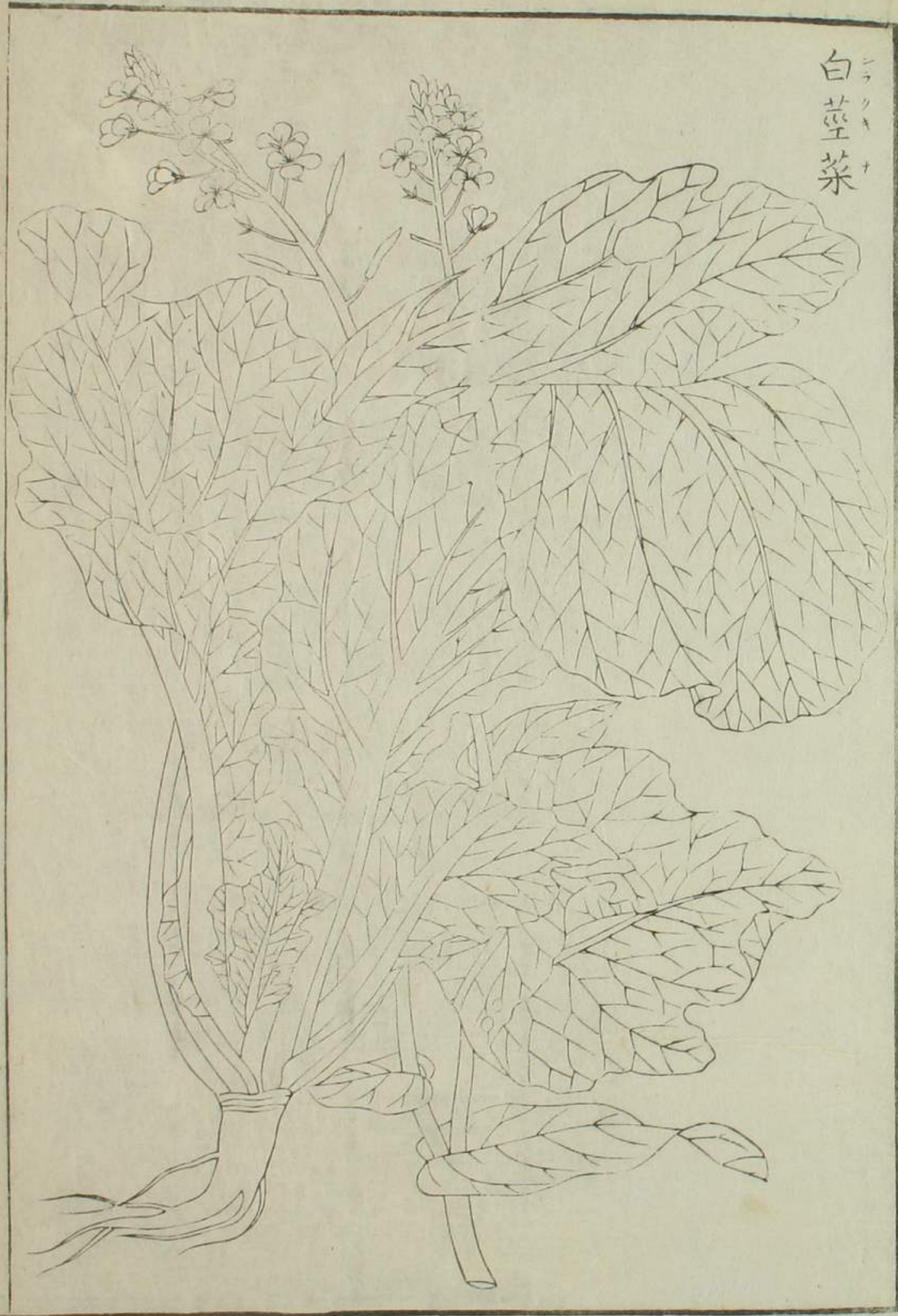
也ハ漬物の名あるべしと云つり按て須受ハ濯と通ハ
 て其根の潔白と称ていひしあるが又菘醃の事ハも
 且しあるべし菘須々艸とも云えり 通菘ハ菘見
 いハ菘葉ハ擬られハ嫩苗と云えり此れハ内膳式ハ菘
 と難葉ハ擬られハ嫩苗と云えり此れハ内膳式ハ菘
 しハ菘葉ハ擬られハ嫩苗と云えり此れハ内膳式ハ菘
 須受白ハ菘菘あり亦潔白根の義あるべし 通
 菘の事とせり此れハ菘の葉と云えり此れハ菘の葉と
 名あり或ハ豆菘の葉と云えり此れハ菘の葉と云えり
 俗ハ豆菘の葉と云えり此れハ菘の葉と云えり
 用ハ豆菘の葉と云えり此れハ菘の葉と云えり
 及ハ豆菘の葉と云えり此れハ菘の葉と云えり
 しハ豆菘の葉と云えり此れハ菘の葉と云えり
 耳無艸といハ菘の事あり此れハ菘の葉と云えり

と式子凡え事耳取しと何の同しとの今耳はぐさ
と云ものわや貝原存州の耳菜未知漢名賤婦以為蔬而
食是尾菜此一種小く葉はとまが冬も枯らして春もく
萌モイ出イ艸あり○又源氏後若菜卷河海抄十二種ハ若菜
薊アキ公事根源チヤキリ菘ス芥カイ蕪ウ葵アヱ芝シ蓮レン水蓼スイリョウ水雲スイウン松マツとあり兼良公
乃流ナリウ此松乃字此事 白河天皇の時時師遠トシノシ子時トシノシ為ナリ
此ハ若松と書てこ何ナニと漬也其此事小く傳るると
甲子松とてへく事さしてハハが事ありや上皇仰らま
侍りマツ小コ和名鈔シヤウ温菘オンソウ和名小大根コオホネ是あり大根の
今按イマアヒ此十二種皆野生ナニ子係コケイ出イ菅贈大相國上月子日

賜菜羹序野中荑菜チヤウど何りて通證曰七種皆野生之菜
也蓋受る不あるべし 後柏原天皇此大津歌りくまか
升ノボ花ハナは何ナニてとえいづぶ末法とをひる也此七
くさ食鑑曰今俗正月七日齋粥中入焼餅子而嘗之此擬
七種菜則迎新之意乎據ニ四民月令云立春日食生菜取
迎新之意又歲時記云舊以正且至老日諱食雞故歲首唯
食新菜ニといはば西土ニと正月七日子七種菜と食と
いふハ荆楚のこの俗事ニや遵生八牋云荆土人日採七
種菜作羹湯以食之ニと云えり白餘ハ菜此各條ニ子識シ別
いへり公事根源ニハ延喜十一年正月七日後院より七

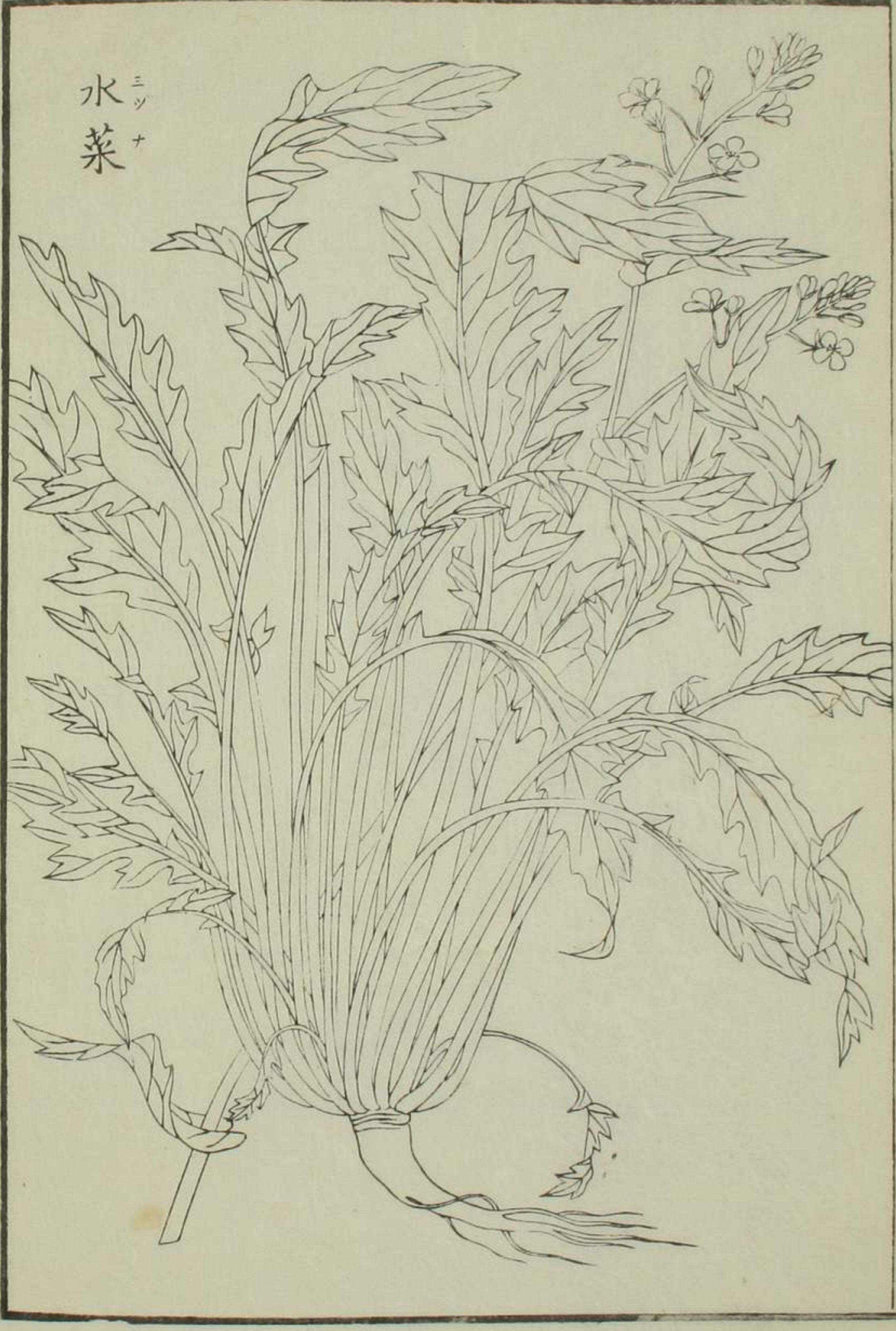
種のお菜と供^ニは其菜羹と食す此ハ菜病なく年中此邪
氣を除く術ありと見え一或前々古字記等子載す可
ハ 醍醐天皇の時例後正月八日^ニ沸糝^ニ或調進せら
引此糝ハ内侍所へ典^ニうる沸糝解^ニ意て食する此ハ餅
ハ熱^ニあるとして^ニ同食^ニど時子^ニ和氣丹波^ニの典藥寮より是
子若菜を加つて^ニ献^ニ里志^ニは主上^ニ感激^ニして末代まで此
嘉例とせられ里^ニりる若菜と^ニ搗^ニ津^ニ必布^ニ引^ニ漉^ニ乃^ニ糝^ニあり^ニ貢^ニ
る地と定られ其地と若菜此里と^ニ呼^ニ名^ニせり是^ニあり^ニ芥^ニ蒜^ニ
等^ニ加^ニへく七種^ニの菜羹^ニとなして庶人^ニ子^ニ至^ニり^ニ服^ニ食^ニする
亦^ニと^ニ多^ニれ^ニ里^ニと^ニ云^ニく^ニ所^ニら^ニば^ニ子^ニ日^ニの^ニ若^ニ菜^ニと^ニ内^ニ侍^ニ所^ニの^ニ沸

糝^ニ餅^ニと^ニハ^ニ別^ニく^ニ子^ニ意^ニ調^ニ布^ニる^ニ或^ニ沸^ニ糝^ニ餅^ニ子^ニ若^ニ菜^ニと^ニ糝^ニへ^ニ供^ニ沸
とし^ニ侍^ニる^ニあり^ニ沸^ニ糝^ニと^ニハ^ニ分^ニする^ニ子^ニ也^ニ糝^ニと^ニ式^ニ子^ニハ^ニ七^ニ種^ニ粥
と^ニあり^ニ子^ニて^ニ舊^ニハ^ニ粥^ニあり^ニ一^ニ或^ニ法^ニハ^ニ糝^ニと^ニも^ニ糝^ニ炊^ニる^ニも^ニか^ニそ
る^ニ實^ニハ^ニ回^ニし^ニもの^ニあり^ニ四^ニ季^ニ淡^ニ子^ニ正^ニ月^ニ十^ニ四^ニ日^ニ松^ニ尾^ニの^ニ神
云^ニく^ニ七^ニ種^ニの^ニ羹^ニの^ニ殘^ニする^ニに^ニ又^ニ今日^ニの^ニ沸^ニ糝^ニと^ニ或^ニ一^ニ子^ニす^ニり
あ^ニぜ^ニて^ニど^ニ所^ニり^ニ糝^ニハ^ニ和^ニ名^ニ鈔^ニ子^ニ鍊^ニと^ニ訓^ニり^ニの^ニ菜^ニ搗^ニ糝^ニと^ニる
の^ニ義^ニとい^ニつ^ニり^ニ説^ニ文^ニ云^ニ糝^ニ以^ニ米^ニ和^ニ羹^ニ也^ニ韓^ニ詩^ニ外^ニ傳^ニ云^ニ孔^ニ子^ニ困
於^ニ陳^ニ蔡^ニ之^ニ間^ニ七^ニ日^ニ不^ニ食^ニ藜^ニ藿^ニ不^ニ糝^ニ禮^ニ記^ニ注^ニ糝^ニ米^ニ粉^ニ也^ニ米^ニ二^ニ肉^ニ
一^ニ米^ニ為^ニ主^ニ肉^ニ為^ニ輔^ニ合^ニ以^ニ為^ニ餌^ニ煎^ニ之^ニ雜^ニ炊^ニハ^ニ和^ニ名^ニ鈔^ニ子^ニ鈕^ニ飯^ニ加^ニ
自^ニ伎^ニ加^ニ天^ニと^ニ訓^ニて^ニ雜^ニ飯^ニ也^ニと^ニ注^ニ以^ニ於^ニ夜^ニ慈^ニハ^ニ御^ニ雜^ニ饗^ニか^ニる^ニべ

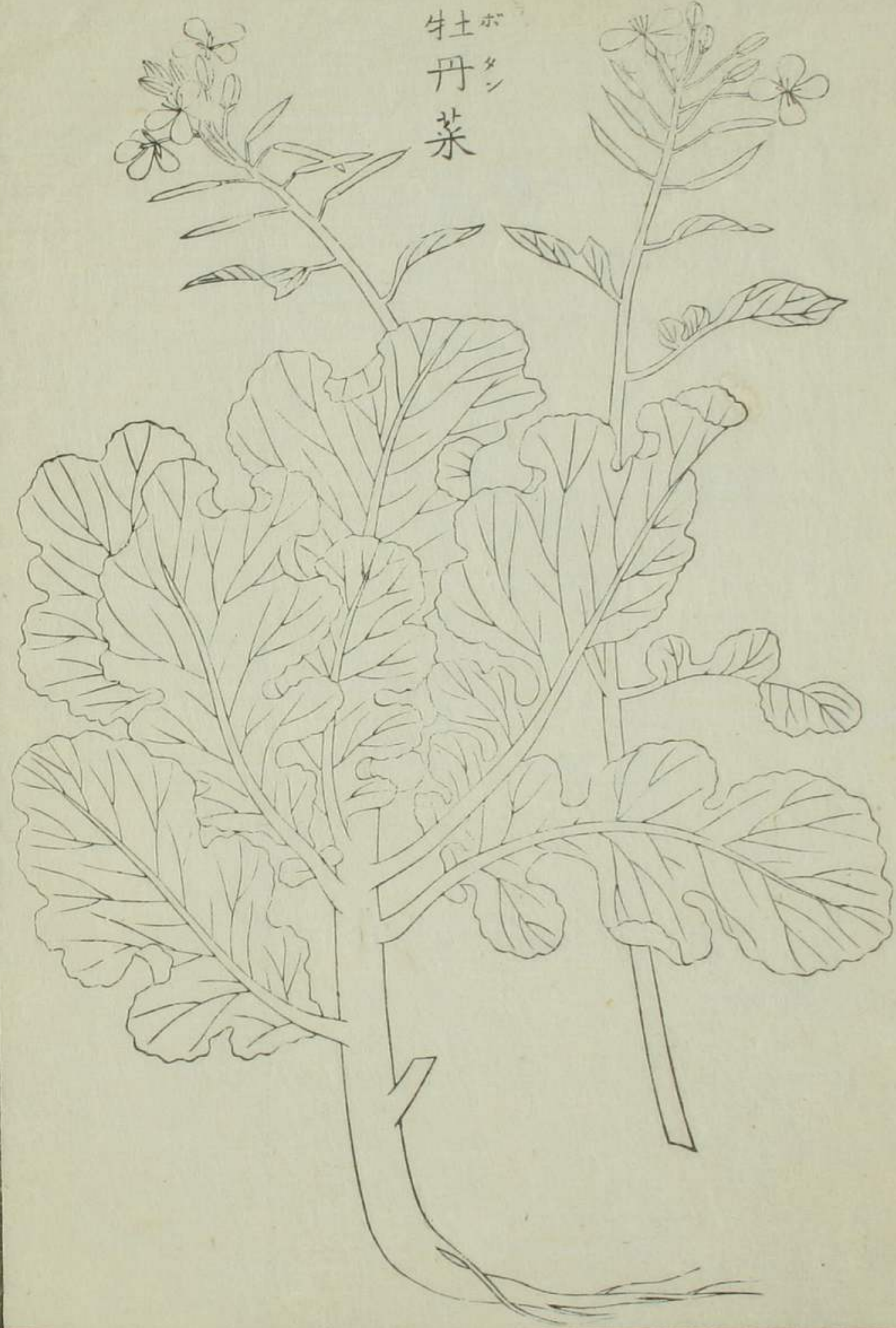


白
莖
菜

水
菜



牡丹菜



みて和漢共に少壯此称あり其書付書女房といひ青春青
 年あど是也又安麻伎ハ天の氣此おのつら人の命と
 保ちぬる理あり式に甘菜と称へ生菜と書し姓氏録に
 ハ青菜葉とありて又万葉の詞にハ新菜夕菜に摘り
 割茹ふと云らし夏冬ふもかぎらざりて四代時に生立ちハ
 此菘菜子どありて凡ハ只菜とのいへば此をのゝ名
 ありと云邦も亦ありり通雅云菘亦菜之總名弘景云菘
 有數種猶是一類止論其さて和名鈔蔓菁を安袁奈と訓
 美與不美菜中最為常食さて和名鈔蔓菁を安袁奈と訓
 るハ今の水菜のたより京師みてハ可美根ありと南土
 に移せば根さへ葉さへ常の青菜と愛しりあり但鄙小

て京菜キョウサイなるものハ即ち各菜の事にて其種の定むる所
江門近郊カウシのはおの川カハより出れば異邦イホウかくどあり
りる蘇菜ソサイは既に菘菜シュサイ不生北土北土將菘子種シュサイノコノタネ之一年即
變為蕪菁ウシヤウ誤今南北キタナミ種タネ之タネれど津國ツクニ蕪菁種子ウシヤウノタネと細南の
地へ撒シるに一二冬フユの後ハ終ハり根ネなき蕪菁ウシヤウにお及およハ人
此ココ知る所トコロあり埤雅ヒヤ云菘シュ性陵冬リョウトウ不凋シ四時長見シヨウジツナガミ有松アリマツ之操
故其字會意而舊說菘菜北種シュサイキタノタネ初年ハツトシ半為蕪菁ウシヤウニハル二年菘種シュサイノタネ都
絶蕪菁南種ウシヤウノミナミノタネ亦然シカドモ蓋菘カウ之不生北土キタノチ猶橘柚キハチウ之變ハル於淮北キタノチ矣
是コトハ必カナラしてハ天五テンゴと蕪ウシヤウあると西州セイシュの種タネてハ只ただの蕪ウシヤウ
と化カの類ルイにて源順ゲンジュンハ近チカ藪ヤブ子コ生ナるものをシて蕪菁ウシヤウと安

衰ウツ奈ナとせるハハ蕪ウシヤウのタネはハるタと名ナ他タ乃ハ妙ミョウあてを根ネのなき
が名義ナシ子コ含カぬかど精セイを致チカしめんハ蕪ウシヤウのタネと疑ウタガや
いはほし○凡ソト菘シュの種タネを下シし三月ミツキに苗サダ生ナて二葉ニエフあり
と卵タマゴ割ワ菜サイと云イハ卵タマゴと書シ紀キ子コ加カひと訓ノハ芽メと通トへ一
況シ子コ蛤カキ殻カラの解ト糸イトしに似ニルハハ也ヤに甲カウ坼テの意イ也ヤ
二三寸ニサンセン延ヒ長ナガと云イハ蕪ウシヤウ菜サイと云イハ蕪ウシヤウのタネはハ頭カウ子コ生ナルハハ也ヤ
ハ菜サイの細ホソ短ミダあると子コ菜サイと稱ナつり二言ニゴン集シる蕪ウシヤウ菜サイてハハ也ヤ
ぬきゆユのタネはハ女メが垣カキのタネ子コ菜サイはハ摘ツクぬ日ヒどなき○前マエ子
いへる京畿キョウキの各菜ナナナハ九條東寺クウジョウトウジの近郊チカカのタネと云イハとせ
一ヒト本ポンより十ジュウ莖セイを生ナし味淡美ミヅカミにして滓カスふし春月ハルツキと

又并西子振入菜河の北陸子三月菜と喚び関東西子て菹
菜と云ふ實ハ同種あり○晚菘河の菘の色深緑子光あり
味いととをれり通雅云秋末晚菘今之白菜也牛肚
菘葉最大又南京京口之菘為上曰箭竿白北京則取入窖
壅培不見風日長出黃葉嫩黃色脆美無滓謂之黃芽菜和
名鈔引崔禹錫食經溫菘味辛是人作黃菜常所噉者也黃
菜俗云王佐以一云佐波夜介とあり今言拔菜にて多く
窖養ムロソダテせり知新謂牛肚菜ハ此ハは度菘菜と云小毒河
可疾ムラサキナあり者甘艸と同食へば早く除りむ○紫菘ハ葉色
紫あり又牡丹菜或は和蘭菜と云わりの根は地上に抽ヒキり

幹立し葉縹色カラタチふして厚くアツク嫩くヤニク白粉と糝しシが如し和蘭
地方の葉色皆忘のり又一種和菘菜河の菘細尖り莖は
近く西岐フタノわりの之を折マキきば白汁出りされ菘類クノハ此を
○菘菁の類莖を抽出ヒキて粥ヤヤく煮マキふじするクノと莖立クノといふ
内膳式漬菜ツケナ載られぬ俗ウツ子小立タツとも莖立タツとも稱ナへり
和名鈔ナ子豐トと訓トり字書ナ子豐菘ハ蕪精と見え又豐ハ菘
と通トりともあり万葉集ナ以上毛野の陸野のくくち折
えやし吾ハまゝん念ナふとし來ナどとも夫菜の類ハおほ
く二三月の次ナ子莖ナ乃ちナて莖花ナと吐ナりナが中早晚ハヤオソク此種
各ナ乃ナ名ナ亦ナ許ナ多ナありナ此花ナや龍陽ナの方ナ盛ナにナ并ナて春ナのナ路ナ

つらと穢が園生も折る色はほみ花りへる胡蝶のをもが
 とおどハ莊周が夢にうりれあん心地しそわらそく乃
 何とらどふよくとまれと穢へる寄はへいとあそれふ
 里○菜を極るに月くに種下すれを四節み絶ふことお
 し夏ハあろく一畝の畝に有と引成ハ陰溼の地とえ
 らびてよし

氣味甘平のて毒ありし油と成りて頭み塗ルハ髪を長
 くら○主治小兒赤遊病と治れ上下と仍き心菘葉を搗
 て付べし即止む又油ハ刀剣みひるば錆を但足の病所
 る人ハ食ふと多のれ○湯盪火傷又失火みて圍の焼



宮重菘
ミヤマシゲダイコン



倉梯菘

紫菘

櫻島菘



櫻島菘



章魚菫

秦野菫

鼠菫



葛畑菫

辛菫

根 鏡 截玉 歌集 散木集 菑固の鏡の折敷
 開 鏡 古乃波奈 孫姫式浪華津之蘆蕨送三冬而
 菜 菹 唐本 韓保 葵 蘆 電 葵 紫花菘
 溫 菘 以上 爾 大菜根 證治 玉本 便覽 菴精 蘿 艸 以
 名物 方言 農書 云 蘿 蕨 一 種 四 名 春 曰 破 地 錐 夏
 曰 夏 生 秋 曰 蘿 蕨 冬 曰 土 酥 謂 其 潔 白 如 酥 也 土 酥 山
 肆 考 〇 即 上 子 見
 蕃 名 ラ デ イ ス

此のものはあつりとも根菜ぞきに用ゐるものありて國
 皆根とて稱へり仁徳紀乃欽に繼根生山持女乃小
 根とて耕し大根根白乃白手あつりて并にあつりてハ根と

いし根といひ白といひ白といひ皆古乃言靈ありてや
 夫吾 邦ハ艸 金石ノ下魚鱈の類みむるまで矣のく
 小、まをわくものなるを菜蔬乃ぶとき四季子孫を
 菜ふれば魏志も倭國地溫和冬夏食生菜とあるし金
 樓子云始皇聞鬼谷先生言因遣徐福入海求金菜玉蔬亦
 之といひあり特に大根とてその 皇國菜の第一
 して西土に種稀ありて唐人斯土に來てハ必其の
 菜と乞求て賞與こと大くならざらん蘭人などハ陽
 みに在て朝夕の食後みを生の大根を切つし其味に
 嗜ふよし蓋大根よく熟毒と制をとりてみ出さる乎吾

人ハ乃シ一ニ引て其ノものトハおわひらうむと引り
多クして其ノ味ハ食所ト移ししき方ナリ切大根の汁
るわざとととるしこそ所やうなれがうと
しかりしとより引りハ切大根の葉子こはりしとて
ふくあり新井氏曰そうして斯方にて常に引し者ハ
珍らしと覺えど其ノ邦カかくそおわひて
心とめてゆをしんもしぬればいと有がき業とい
宛黄蘗の悦峯和尙に菜菔の事尋しス斯國のぶときわ
のハ引しとと引らむと引しと引しハなし引りて
ハ皮をむて白もの形し愛ふて紫大根と云々の如
く赤とを引しと引の太おて此とて拂子乃柄と出し

示されぬ味ハ辛く似るものも引き斯國乃物の出と
く色純白味甘と帯て太長もの引り足色せと引りし
と引り存藩おて大隅様島引と根太の菜菔葉子産るハ
那し引連人ハ此ものと示して漢土にては觀や否やと
引りハ此地の引多くハ蕪根乃びとく適根の長とは蔓
菁蘿蔔と云ひき皇國のごと潔白也丈あるのち
どかく味美蔬乃鏡給ふるハ足寸結らんと賞じあり
子群芳譜云水蘿菔形白而細長根葉但淡脆無辛辣氣可
生食亦有大如臂長七八寸者則土地之異と引りか
大根ハ斯方子ハ取み足らぬもの也
大和牟州附録子薩
摩大根ハ常のよ

大あり心の系直立のぼる地上に根出るときも根は
葉茎までと常のま踏まりとあるは根島大根のま根
ちり大隅國分地方は延喜式管羅腹一段種子三斗と
産するとも亦ふり也
凡う、法の法預その圃を耕はふと涼くその塊を碎
くこと細ふして早きものは六月に境と起て糞壤を和
熟て六月土用後七夕の前迄あるは八朔の頃より下種は
毛子を荏油芥油に浸して灰に雜馬通と乾し綿のぶと碎
きまおし又沙土をほじへ其上に布覆ときハ種兩等
苗と敗られど亦油氣にて蟲の害と避べし或ハ根葉の
煎汁と澆ば虫と殺はと云凡原野瘠土に自生のハ小し
て辛く又赤膏地に播るはハ辛苦の氣脱び沙壤の熱

田子作るハ右くして柔輕漿と會て晚く味甘し唯尾
ハ稍若辛もわき凡長あるは隨て根頭地と抽は淡青
色と上出と味ふ地中におるハ白し又根の上は見えは
ると振入と云○此の諸道儘多し但尾張乃宮重に産
ハ豊大くて味甚絶り毎歳に京師に輸るに匹馬の
脊僅に二根と駄はとりや土人時と候は長多からし
て織線のおとさ日乾して四方へ流るは昔あり
法州亦此製ありて庭訓往来に織羅菫と云え里語ハ
せろのんあんどのせり此揚花菜の類あり○山城
の吉田孫津の倉梯武茂乃練馬中野信徳の景山肥後此

菊池あゑ乃吉野伊勢の洞津肥前乃竹邱播磨乃津野大
 隅様島ふどに培きその都て名産子係是唯地道子固
 且稍優劣ありといへど生ハ澄脆熟ハ肥美なり三月
 楚夏のは辛く冬ハ甘し存その種類子固まり夏より秋
 にかけて種子を下し冬に根と引明歳春夏の交に莖と抽
 て淡紫の花さく漢人大根を紫花菘と云ひ花と角と結
白菜花ふど味ふも色子像は是也
 び糞蛆の形あせり子は菘の大あるが如く或ハ稜あり
 赤水玄珠子と夢ト子と云本州○三月大根餅大根わ
 備要にト子と名蓋菘トと通用○三月大根餅大根わ
 江陰縣志ハ楊花蘿菘ハ蘆菘一種こはハ九月子種と
 細長味鬆脆といふもの邊ある也
 布三四月此交に莖を採ふその小あると江門にて細根

大根と云○夏大根わき本州吳瑞云夏月
復種者名夏蘿菘この種子ハ信
 濃の景山駿河の清水より出るとのよし故に景山清水
 と通稱とせり味ハ駿河風土記曰蘿菘入内膳司料と云
 るハ春種ハ夏大根わきてわきて奉貢し取玉ひしある
 べし○嵐大根わき一名辛大根味辛し麵の具に宜し
 或曰北征録ハ尾張より出るとの四時と貫して生ハ辣
 謂沙蘿菘なり尾張より出るとの四時と貫して生ハ辣
 く熟ハ甘し信濃本宅橋畔但馬相模のわきりみて作
 あり或曰と近江濱吹山に生しとのわきり
 一名膠吹大根といつる形ハ身長尾よて嵐の如と
 日本藩日向の味部ハ薯原大根わき亦嵐大根に類て

の大小三四尾各月採採て塩漬とて夏に多り肉理紫に
 黄く香味他は佳なり此の薯原てふ地は自生し或ハ
 移して畝圃の中に漫撒せり能生茂且又一種原野自
 生のハ根最細て高き至らば俗に天道大根と呼ぶり綱
 目載以諸葛菜蓋これ歟○守口大根を採津管神祠の
 前子種しものと其土人宮前大根と味ぬ又河内子も阿
 比長條子て脆美し糟子蒨て四方へ致以又一種津の地
 田作り子似るものハ潔白の長條ど其の土にて水柱
 大根といひ京師にて中抜といひ江門にて自抜といへ
 已往其同種あり凡、京師の杖根の直根をかきハ其地石多
 き故其は精氣土頭み出て其は濃し

○秦師大根わり秦師ハ相模地名本自生なり此の形
 紫細長條あり其東地方ハ特に饒くやしあふ京師にて
 長根浪蕪子て細根てふもの是也といへ蓋むりしハ
 大根と名しと此輩もて東方にて作るハ硬く浪蕪の
 ハ饒くうほし生ハ辛若て食ふは味も固今塩漬とて
 虎澤より出以長條の乾大根といへる亦この類ぞかし
 北征録云沙蘿蕪根長二尺許大者徑寸下支生小者如筋
 其色黄白氣味辛而微苦亦似蘿蕪是似て非あるは黄白
 穩當ならむ○紫大根一名赤大根莖葉まで紫色と帯て
 肉の中は淡紫色かざり西州の俗迨節子鱠とし較り圖
 書

集成引歷城縣志云紅蘿蕪形如瓶然亦有白者紅者味辛
 又農圃六書子紅皮蘿蕪と見えし並み赤大根あるべし
 成形圖說卷之二十一
 二十八

○錦大根一名紅大根亦渦大根ありハ暹羅大根ふどと
 いつり糸ハ菘菜ハカに似て紅葉色四時菘ホカ根と剪キバうち
 に紅纈ヒベ文ありて鮮美し伊勢尾流イセにてやしあふ○章魚イカ
 大根あり一株カサあり数筋と細根と分出して長尺チにトよ
 ぶ章魚脚イカに似るあり同ドウより本ハ相摸サマあり出しぬ○
 兩股大根ハ根ネ子コ齊イく岐マありなり日次紀事曰俗稱福來
 十一月子日所供子祭之饌每品加大豆又供兩股大根○
 大根の葉乃乾カると乾カ糸といふ根とハ冬中簀サ下カ然
 霜フ子凝コえめしと乾大根釣大根といふ網目稱乾蘿蔔為
名とあり仙人骨とハ忌陸奥南リ初メて凍大根と製ツ已マ寒
くしき稱目からどや

月の漸コ冷レ子露サ天レ日乾カせしハ香イ類ル味ミと失ハ一リ○浅ア菹ヅ
 ハ大根と洗ア浄ジ水ミと乾カさしめて塩シと附ツて桶ク子コ飛トび夏ナ月
 に至りてハ食クふハ味ミへど○貯タ菹ヅハ或ハ百本後々も
おもが佳しぬ冬フ至ルの前マ後ノ土ツ大根と搗ツとハ塩シてハ煎ツ
よりの名といへぎク湯ユにハつリほシてハ宜シとハ尺シてハ塩シ一ツ斗ト子コ新シ稻イの糖カとハ米メ
ぎ三サン升シとハ入レてハ之レとハ淹ツ固ク桶クとハ封トてハ石シとハ壓オふハとハ常トの
るおとしシるハえシくハ貯ルむハとハ欲クみハ毎ト月ツの度ドをハ以テ塩シ一ツ斗
 とハ塩シべしハ橋ハものハ色シ紅ニ味ミ愈ニ良シ○寧ナ菓カ菹ヅのハ法ハあり
 致富全書チ子コ糟ソ蘿蔔カとハ尺シえシりハ其レ他ノ味ミ菘カ子コ漬ヅとハ或ハ麴カ
 子コ麴カ物モノとハいハつリ麴カハ婦女ノ詞ハ味ミ醬カをハいハひハり

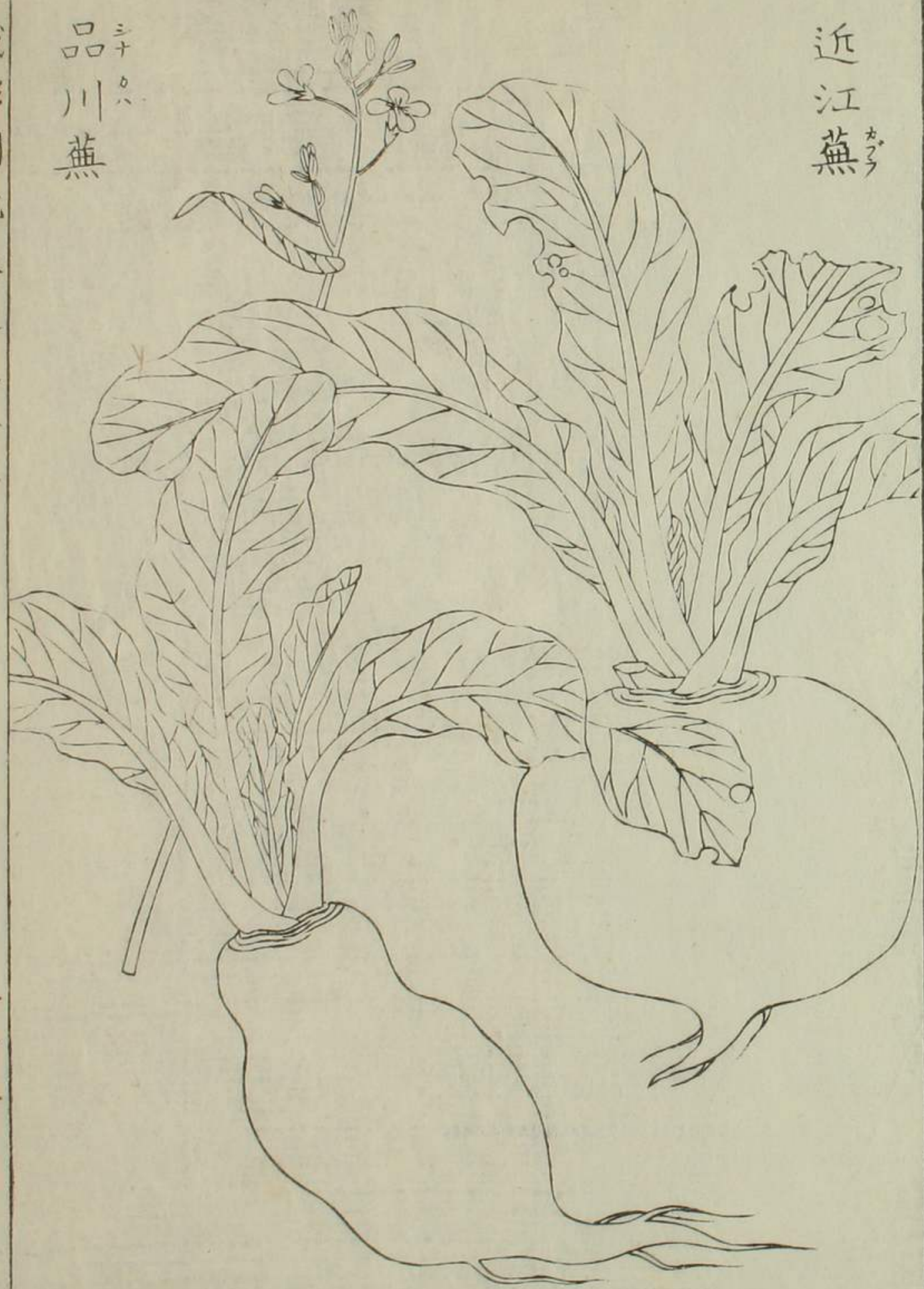
氣味生みてハ辛冷あり食て氣液汁也熱ハ甘温あり食
 へハ氣液液以○性人血と消以故ハ常に好く生薑葡萄と
 多食ふ人ハ發熱と白くハ血虛乃人好肉く食ふ魚々ら
 此の候何事志りいへど發乃斑白なるハ生質も中々
 うへ目醫耳聾なるハ吾より先ハ戒りど一取とて上
 口利ども下口盡ぬ口惜さとをのしき語も皆人まの所
 づりの形氣どかし況や 大邦の種ハ四時日周子益所
 是能會淨熱毒と制以熱どげいゝある患ハ妨ふし○
 主治衄血子落葡萄汁と鼻孔中子滴入て良○薑血舌血
 子亦生汁子塩と鹹子行入て嗽く魚し嚙てとよし○急

口痺 痺子ののんど腫 生汁を徐くと熱くして良○卒瘕
 人穿子言候から 生汁子生薑の絞汁液和徐くと液登し
 毒域神方子皂莢一挺と皮子と去て落薑三本と切
 片かし水二盞と一盞とせんし服し三回毎小色ど
 出るなり ○燒酒子碎て醒さる子生汁と多く飲べし
 解船子よし 濟急 ○蕎麥及温飩とくらひ毒子あつり
 乃る河ハ生汁液飲ひべし ○蜈蚣耳子入たるハ生汁と
 耳子擗りげハのりら出 ○蒼鏡の咽子噎て遠巡子死
 子とらんとする子生汁と鼻中子灌てよし 本朝 煙子
 薰て死と殺し子生汁を連に咽より、あバ更る又落葡萄
 一斤と口中に銜おるときは煙氣人を毒むらふと能む

或ハ新水子乾蘿蔔汁搗爛して飲もよし醫林集要又云
 居民逃避石室中賊以煙火薰之欲死迷悶中摸索得一束
 蘿蔔嚼汁下咽而甦むらし松平相州後子百田某モア醫
 あり江武の地ハ冬春必以火災多しとて葛ハ子ハ鞋一
 足大根一本或常子壁に懸る是大根の汁能燬火の毒
 と防くがゆゑあり○同赤く狂躁ケレ子蘿蔔の生汁を用て
 黃連ハ甘ハ竹ハ汁ハ各半ハ蓋ハ和ハ白ハてハ服ハ以ハ愈ハしハ暴ハ證ハ○誤ハてハ銀ハ粉ハ
 と飲む子急ハ子生汁ハ飲ハむハべハしハ傷ハ醫ハ○豆ハ腐ハのハ毒ハ能ハ癒ハしハ
ハ湯ハ子ハ煎ハてハ飲ハむハ朱ハ氏ハ○胎ハ癰ハとハ洗ハふハ方ハ毒ハ頭ハ小ハ兒ハのハ胎ハ
ハ胎ハ子ハ隨ハ心ハ癩ハとハ大ハ根ハ乾ハ葉ハ蓮ハ葉ハ車ハ前ハ子ハ各ハ等ハ濁ハ酒ハ小ハてハ能ハや

ごとに蒸し洗ふべし○湯火傷ハはハ大ハ根ハのハ實ハ黃ハ檠ハ乃ハ粉ハ各
 分ハ研ハ合ハ附ハありハ○癩ハとハのハ卒ハにハ何ハありハもハ腫ハ疼ハにハ大ハ根ハとハ擦ハ
 しハそハ汁ハにハ小ハ豆ハのハ粉ハとハ入ハ附ハべハしハ大ハ根ハをハ子ハ時ハはハ大ハ根ハ葉ハをハ
 てもハ研ハそのハ汁ハとハ附ハてハ健ハ○淋ハ病ハ子ハ大ハ根ハのハ子ハ細ハ末ハしハ白ハ
 湯ハみハてハじハ一ハづハ用ハふハ○烟ハ叶ハ子ハ喫ハさハるハにハ生ハ大ハ根ハのハ紐ハ汁ハ
 とハ服ハべハしハ一ハ萬ハ方ハ○暎ハ眩ハ膏ハ諸ハ淋ハのハ疼ハ痛ハとハ患ハふハべハつハ
 にハ效ハ大ハあハるハ蘿蔔ハとハ大ハ指ハのハセハイハにハ切ハ片ハてハよハるハ蜜ハ二ハ兩ハにハ
 浸ハしハ半ハ時ハ許ハおハろハてハ取ハ出ハしハ襖ハ蓋ハのハ上ハにハ置ハてハ漫ハ火ハ小ハてハ乾ハ
 可ハ乾ハしハ乾ハばハ又ハ蜜ハとハ浸ハしハ又ハ取ハ出ハしハ乾ハ蜜ハ二ハ兩ハのハ蜜ハ乃ハ畫ハにハ
 あハるハまでハ煮ハめてハ乾ハすハあハがハりハてハハハおハ返ハしくハ乾ハくハ煮ハめて

品川蕪



近江蕪

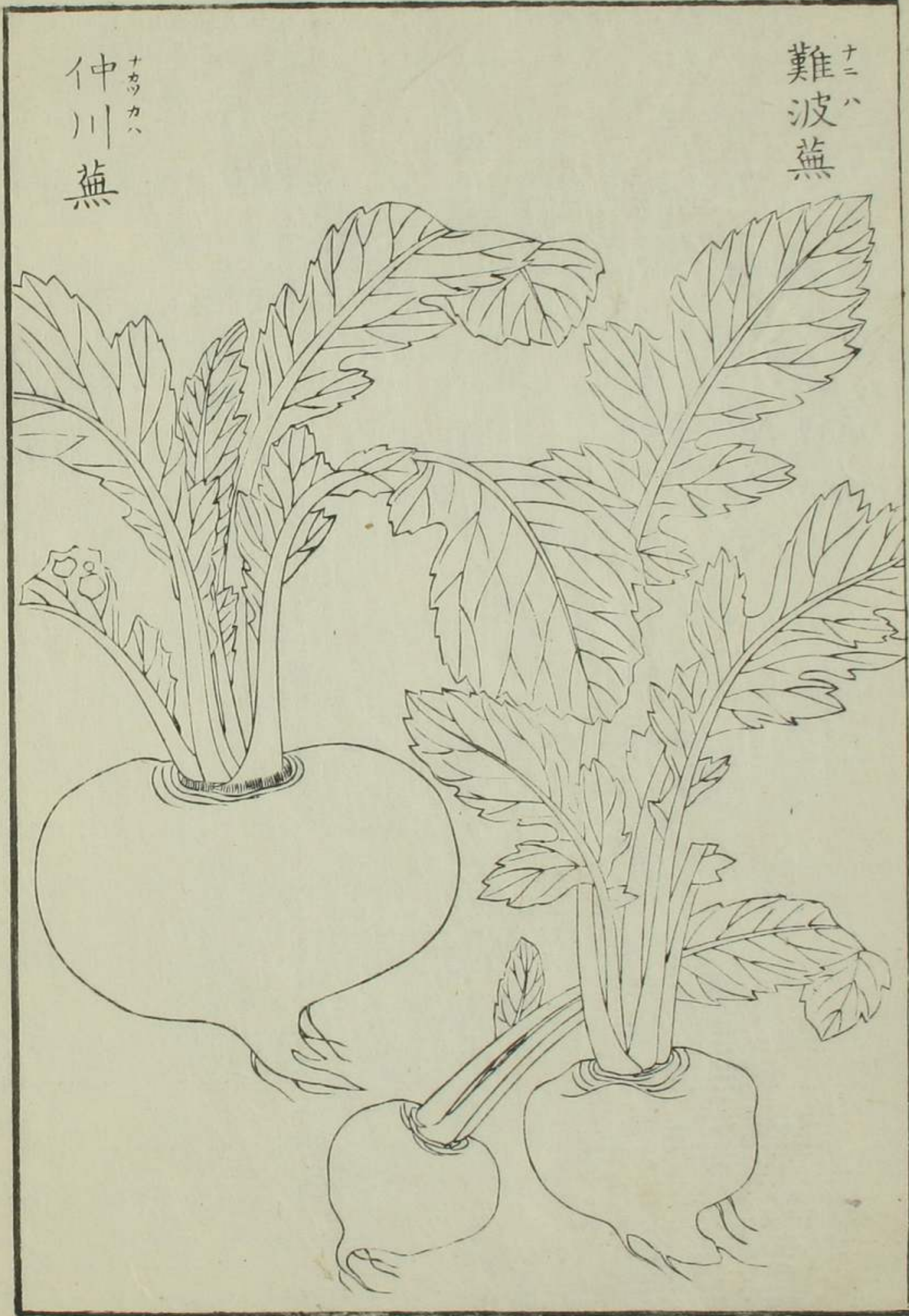
カコカ
夫良書紀和名鈔引毛詩采葑采菲無以在下體注下體根
 對と出―て蔓薯と安哀奈と訓其根莖を加布良と訓也
 ば交ハ一物お―く象と根と訓二、讀わのてふ小似
 甲は進也是子て既子粒の研子辨へるが如し又俗小似
 蕪と加夫良奈といふ言も傳りて菘蕪ハ一ふせし出と
 河ふよる之人懸記る花多形
 りくき者仕也も丈はハの尺
 一て人か込ハ一ハ小一拵拵事
 人識みれかハ一ハ不本てと子
 子摩片はん根食拵一花拵拵
 倭狭一智と子用み株種拵拵
 人少成愚ハ子立も大に之菊
 あさるバ不才地者此支皆大し一富の相百姓ハ美と悪と
 ば人何も子か支皆大し一富の相百姓ハ美と悪と
 不ハそのまては概心子持を解べ事みて凡
 求師の用ゝ相そ若ら取養つ、早竟ハ
 もみハ立とわと心
 あるは立とわと心
 の發論なりと心得



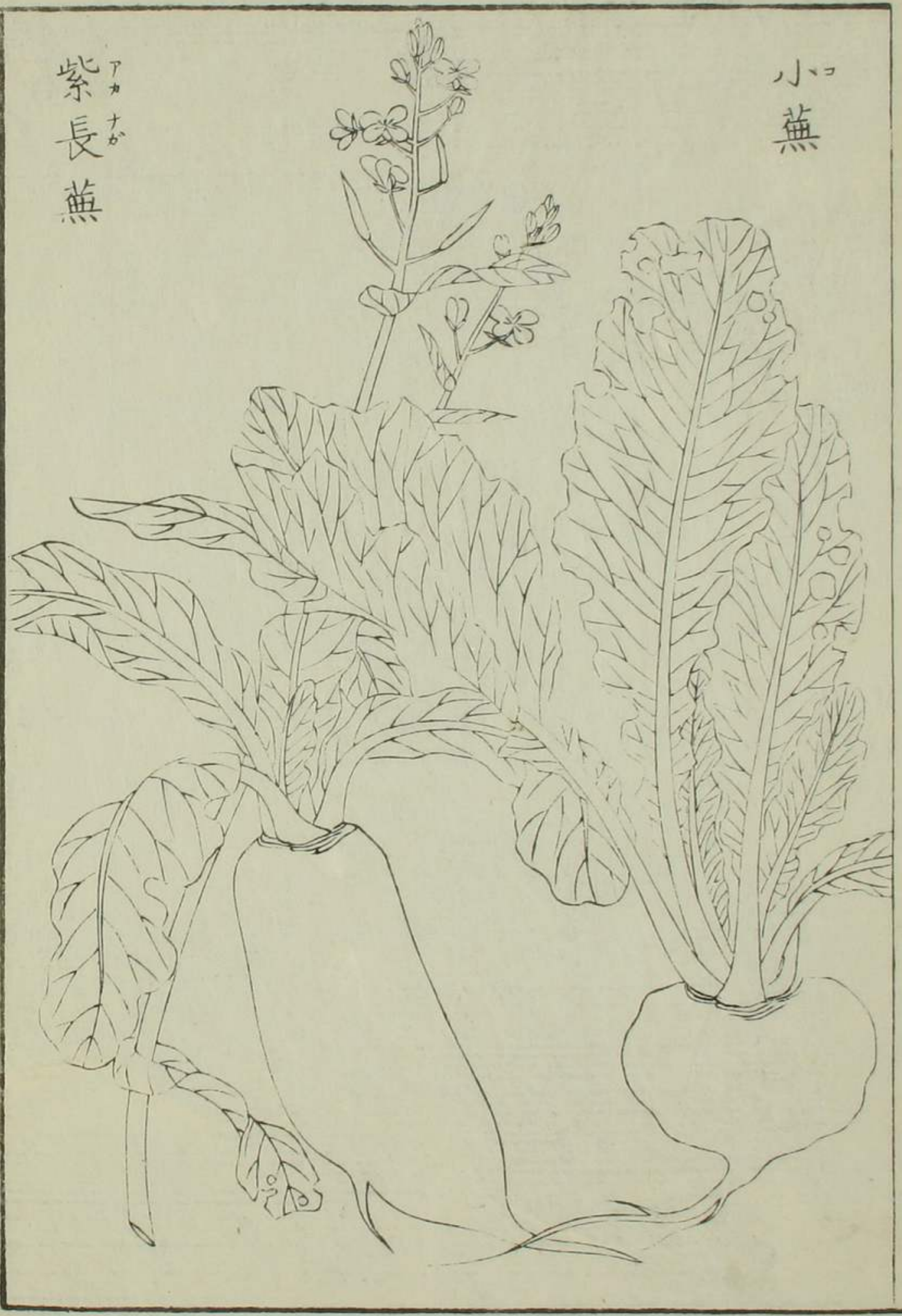
大蕪オホカ

難波蕪ナニハ

仲川蕪ナカカハ



小蕪



紫長蕪

蕪 根 呼 為 蕪 根 猶 是 蕪 薯 之 號 蕪 薯 南 北 之 通 稱 也
蕪 今 言 類 聚 雜 要 供 御 中 蕪 子 用 多 矣 又 曰 蕪 薯 一 種 而 四 名
蕪 薯 別 錄 蔓 薯 唐 水 州 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土

蕪 薯 別 錄 蔓 薯 唐 水 州 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土

蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土

蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土
蕪 薯 一 名 事 物 異 名 春 曰 破 地 錐 夏 曰 夏 生 秋 曰 蔓 薯 冬 曰 土

言ひいへるをハ古事記傳子鳴鏑と讀て加夫良とある
 ハ蕪根本鏑箭の根亦似るたふ名く俗ノ鏑乃蕪根也
 似るより名取しと云ハ非也鳴神夫理矢の神乃
 三ノ畧き理夜ハ良と切り是子て加夫良てハ義也
 或曰凡ノ草木の根株と加夫といふ子株の土の上
 抽出又ゆるハ蕪根と加夫といふ子株の土の上
 株と用とせむの蕪根と加夫といふ子株の土の上
 の形之に似るれ蕪根と加夫といふ子株の土の上
 やどと又海藻ノ根と加夫といふ子株の土の上
 形と野猪の頭と加夫といふ子株の土の上
 ハ野猪の頭と加夫といふ子株の土の上
 明年春分の節に花を發す其を蕪とすと或ハ
 飯子糝一根子代ると蔬中の利用五穀子亞る也故也

持統紀の令天下勸殖蕪菁以助五穀と尺えり
禮月令
命有司趣民收斂務蓄菜多積聚注菜所以助穀之不足
故蓋之為備詩却風我有旨蓄亦以禦冬注蓄聚美菜
 膳式營蕪菁一段種子八合總單功三十一人半下今諸道
 共子之を種はる所ふし其の種類と亦多く圓く長
 く大小亦ひとしからど又居蕪子持蕪晚手蕪子の名不
 あり完美のは肥豊ありて滓渣ふし其子名々はは
 近江の産大尺回圓く長白し又山城東山庭川雜耳子採
 律雜波ふどと相同し江門不川のは年毎子官子上る
 不どに俗子貢蕪と呼べる近江蕪根と同乾しはるハ醃
 藏とふ次收蓄て四方一致やり式乃漬春菜料子蔓根須

須保利六石とて普根須々保利一石ともありと和州葉
子字鏡と引て菹字すあり酢字と、不里と引ては須々
保利ハ漬物の名ふるべしと見えたり今迄に浪新等も
て蔓菜と採り陰籠やると熱菜乾菜などいひ添菹とい
ふハ酸蔓と称ふは須々蔓の轉るもや按ヨ公事根源
はの菜菔とありに採らばるるも大根と漬物も是も
ありの名ふるべし採らばるるも菹代乃義とぞお
はる○子ハ油菜子とおれど油と酸とはべし○按
蕪の最モトモ大あるものハ伊豆のハ丈島より出るハ丈蔓ふ
里俗オホカガ子大蔓とも云ハ丈島子てハこの蔓を刺穿て釜乃
ぶとくし飯と炊き蔓を煮るとありと親見しとの話と

里是明一統志徳安子謂根子菜根似蔓普而大又似蘿蔔
他處皆無惟安陸為之といふの草からし本藩大隅の中
伸津川イダシ子考る者ハ蔓色あり是食療本州の九英菘子アツ
登し又根圓く稍扁く截て金暈ありと俗オホ子天王寺蕪と
稱ふ本津今宮子の地オホ子甘るもの大小二種あり乾て蔬
とせる者白くして風味甚くを此里正字通子蓮花白と云
えり又根の圓て長と長蕪と云信濃子ありと云ハ
正字通子箭筈白オホ子ものぞ王整姑蕪志云蕪菜出群城
肥白而長名箭筈菜冬月醃藏以備藏故名是亦此間の長
蕪ありて江戸の蕪菜菹とこの属あり又一統志陝西
子

方產馬王菜味澀多刺即諸葛菜也今按子諸葛菜ハ網目
引嘉話錄云諸葛亮所止令兵士獨種蔓菁者取其纒出甲
可生啖一也葉舒可煮食二也久居則隨以滋長三也葉不
令惜四也回則易尋而採五也冬有根可食六也比諸蔬其
利甚博至今蜀人呼為諸葛菜江陵亦然又宋の范祖禹が
唐鑑云唐德宗建中中朱泚叛攻圍奉天城中資糧俱尽每
俟賊休息繼人於城外采蕪菁根而進之德宗帝召卿相將
史謂朕以不德自陷危亡公輩無罪宜早降以救室家羣臣
皆頓首流涕期盡死力故將士雖困急而銳氣不衰此この
菜根亦人命と活けし是れ也然ども師を他公ふ出しそ

在陣の間に蔬と云はぬは蕪菜以第一と云は四時に拘ら
ざる即生て絶ど採食ふべし夫治乱とくに衣食住の
三者を急みして古の主將必は粟帛塩豉の末といへど
も皆自知て其辨用故做主と云ふるも古の日の如政
と有司のものを要て表裏の若く内外の支配はるべきハ
蕪菜辨へざる時ハ終ハ有司主財と照管て廩庫虚耗に
至り亦措所をたらざるも有りその經生或人の書と講
し兵と論するも其本つく所と省ざればこの失を免
むが法はと云ふ也 臣國柱 嘗て加藤清正朝鮮在陣の日
を留官が下川五人へ軍中の法令出征の餉を下

知せし手書と云ふに至^ル厳切^ニして其^レ能^ク書^キあり予^ハ申^ス葉^ト
 種子と取葉の五斗あり其^レ一石ありとも急^ニ可^ク取^ル誠と
 の事あり次^ニ子^ノ前後の文までと写し載ぬ其^レ文曰^ク態^ハ
 園兵次^ノ遺^レの仍^テ孝^ニ後^ニ大^ニ友^ニ所^ニ上^ニは^レ果^シに^テ子^ノ息^ハ場^ト
 法師事^ニ某^ト一^ニは^レ成^ル法^ノ預^ルに^テ就^テ夫^レ波^ノ取^ル之^レ者^ハ妻^ノ子^ノ之^レ義^ハは^レ
 内^ニ可^ク宿^ル者^ハ此^ノ以下^ノ數^ハ條^ハ大^ニ友^ノ家^ノ預^ル人^トを^テ肥^ル後^ニ
 ぬ^レ一^ニ兵^ノ糧^ノ之^レ像^ハ不^レ千^石者^ハ万^石不^レ子^ノより^テと^ル便^ハ船^トより^テ可^ク取^ル
 載^ルに^テひ^キ此^ノ方^子不^レ入^ルとも公^ノ裁^ハの^レ法^ノ每^ニ用^ル之^レ立^ルに^テ皆^ハ不^レ
 苦^シの^レ兵^ノ糧^ノ運^ルの^レ一^ニバ^ハ及^テ遠^ニ惑^ルの^レ每^ニ大^ニ豆^トと^テ二^斗石^ト三^斗石^ト可^ク
 取^ル誠^ハの^レ事^ハ一^ニ味^ノ噌^ノ斗^ト二^斗入^ルの^レ桶^ト二^百と^テ三^百と^テこ^シら

一家^ノ取^ル内^又も^テ潤^ク存^ル高^ニ漸^ニ所^ノ取^ル所^ノ中^ニと^ル改^メ味^ハ味^ト
 有^ル次第^ト其^レ誠^ハ味^ハ味^トのか^レり^ハ小^ハ大^ニ豆^トと^テ相^テ渡^ルの^レ
 り^ハ不^レど^レ載^ルに^テも^テ換^ルに^テ不^レら^レば^レ一^ニ場^ノの^レ儀^ハ之^レを^テ一^ニ
 い^ハも^テ二^斗と^テい^ハる^ハ入^ル事^ハの^レ皆^ハ得^ル之^レ意^ハ可^ク取^ル誠^ハの^レ事^ハ一^ニも^テ
 其^レ三十^帖不^レど^レ其^レ取^ルの^レ一^ニ茶^ノの^レ湯^ノの^レふ^レる^ハか^レば^レ誠^ハの^レ事^ハ
 有^ル之^レの^レ取^ルの^レ一^ニ嘗^ハ又^ハ名^ノ作^ル具^ハ是^レ名^ノ禮^ノ屋^トへ^テ去^ル年^ノより^テ其^レ
 已^ハ有^ル之^レ由^ハの^レ又^ハ取^ルん^タう^ハも^テも^テ中^ノの^レ何^トと^テ不^レ取^ル誠^ハの^レ事^ハ
 い^ハつ^ハの^レ用^ハ子^ノ可^ク立^ルと^テ存^ル延^ル引^ルの^レ就^ルさ^レの^レ限^ハ子^ノて^ハい^ハる^ハん^カ
 之^レの^レ儀^ハの^レ取^ル前^ノ者^ハ中^ノの^レ取^ルの^レ皆^ハ定^ル而^テ可^ク為^ル其^レ分^ハ一^ニ去^ル年^ノ
 等^ハい^ハつ^ハの^レ儀^ハの^レと^テく^レ百^石禮^ノ前^ノ不^レ取^ルの^レ就^ル其^レ等^ハ不^レ禮^ノ取^ル

老い候砲之儀出来次第此方へ一は若誠玉葉之輩も出来
次第急一若誠の事一候砲をかし必者もても薩摩の方
の者誠共お百千人のふらどお拘て若誠つゝの若公人
お子二子こふらど誠以弟お拘可若誠の事一は扱之候
也ふ是以て涉陣之儀引解之儀若虎然一若誠用意之任
之の事一城然然之儀之儀事不自由の如くづらひの
由相守の儀やうも不自由之儀之儀之儀之儀之儀之儀
外へ不自由の儀づらひ然之儀之儀之儀之儀之儀之儀
為曲言セコトいふ一大互取之者不くと若誠小屋がけと
仕度中申の儀、本行ともさらせ小屋がけ心安は候

こ中申付の事一は後之儀も若誠下舟片時急可若
誠の事一は前申中申付舟は何程も若誠以候とらせ
て中申付の舟少みじらくの旨おつてとや中申の儀
うと中申付の舟一の如く具是等の如くさし候、の如く
さし候十若誠共百若誠共一は表へ若誠の
人と若誠の如く重てハ若誠若誠の如く仕一ヶ月之
二ヶ月、とだえ若誠の如く可若誠の如く用若誠
若誠の如く用若誠の如く急用以下若誠の如く仕て
若誠則此返事之儀おりの儀一若誠月之儀若誠の如く
の儀、可若誠の如く若誠の如く若誠の如く若誠の如く

貫子て南南堂までも多うい少の候といひ書信不遇
之解沙流し浪ゆり一ら川をくまうちやうちんら川を
くと一夜くみ丁程どがしゆ程のと千丁計て岩城又油
も二斗入と二三十樽て岩城もふゆる事志よくごい環
存有次第此方へ可岩城跡こゝの京都へやき十も十
みもこしらへて重自然係と涉成かどは成作事とて有
之は皆不事歎極と兼てこしらへて重の事以上廿三々
条之通片時も差急お備て城當陣存く外也川事とて有
こは石此方へ不中重のた城の向ふ手物にて岩城去年
こちがひ當年ハ差許も差事とて不自中川石下とてを

外中守不て有他町の五月廿九日清正加岩森左衛門
どのへ下川又左衛門どのへ日付と書書の省子以上上り
合書尚以根子所忍兵次中を以て得て意の又亦と荷
物積ゆ向こしの時一艘くいりやうの物をつまはさ
しげををばて城の去年より亦と積ゆ分兼用目録仕ゆ
ていそぎ可差越此方子て船政其の由おてお改ゆ中
畧地
地有るりぢみ人大工共人大据十丁くろろぢひ五百是
目成共十重目成せお調大分差急て城の貴田重本下い
づここいつらうたせゆごどく一人と刀二百こしづ、
ういせそ方をわめさやさせて岩城の白うぢや子は

一め形仕の一人こし中べくいいつまては徳職人
差越のハ道具以下丈夫持来のやうに三月付此方々
居の職人其乃を多くてやくこくをいうるし二三
世目におお綱のふて差越此方々もうるし一丸おし
くやくまたくぢいふうるしとこし中べくい以上の
件々肥後公ハ昨今新附新参の臣庶多ればかくも有り
しよや因て採子駁戎慨言征韓の事を論ひし中に大岡
乃佛心はつひり明の國を服役せんと思はしりるは
小西の長子おわくハあゝぬ境の年月を重ねてくるし
も軍に学まぬまば必無しくていふでとくあゝむぢやと

思ふ心深きにそめてあるまじきわやあちは引出しけ
るさうと始り御を奮める心のきゆまはりしけ加藤
主計政清正ぬしみてひるぶるに明の國海で打平らる
をいあゝじと深く思ひ使て々のまぎらハしりりる
乃也が和睦のそぢと更に議事は大きの皇國の
あめあもいとく忠誠がましは此ぬしにあんまらるか
わにそれバの長かぢかたへの人々ハその増えれ
て不和ぶりしとぢも朝鮮明乃人其を此人とは討みい
まど子物みおとひして平壤録もも清正才能勝行長數倍
かど、ぞいつりりるぢあり

汎大岡朝鮮を征て明とを
伐んと謀るのしあり

